様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　２３年　５月　５日現在

機関番号：１２６１３
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：２０５２０２１７
研究課題名（和文）モダニズムと自伝――自己表象をめぐる理論構築の過程
研究課題名（英文）Modernism and Autobiography: Constructing Alternative Theories of Self-Representation
研究代表者
中井　亜佐子（NAKAI ASAKO）
一橋大学・大学院言語社会研究科・教授
研究者番号：１０２４６００１

研究成果の概要（和文）：本研究では、モダニズム期に行われた自己表象をめぐる理論構築の過程を、同時期の自伝的テクストの調査、収集、及び分析を通じて検証した。具体的にはまず、ヴァージニア・ウルフの未完の自伝的作品をその草稿から分析するとともに、同時期にイギリスで出版された女性ジャーナリストや移民による旅行記、自伝、回想録、手記の調査を行い、ハイ・モダニズムの理論との関係を探った。これに並行して、現代批評理論およびポストコロニアル文学の観点から自伝、自己表象に関する理論の再構築を行った。

研究成果の概要（英文）：In this project I examined the process in which modernist literature constructed alternative theories of self-representation. I studied autobiographical texts written by high-modernists, with a specific focus on unfinished memoirs by Virginia Woolf. At the same time I researched on autobiographies of the modernist era, such as memoirs and travel writing written by women journalists and immigrants; by so doing, I tried to reconsider how high modernist theories were related to these non-canonical texts. Also, I attempted to reconstruct a theory on autobiography from the point of view of contemporary critical theory and postcolonial literature.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：英文学
科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学
キーワード：英文学、批評理論、モダニズム、自伝

１．研究開始当初の背景

研究代表者は近年、ポストコロニアル文学の自伝性の問題に取り組んできた。2008 年１月出版予定の著書『他者の自伝』の第４章では、エドワード・サイードの自伝を取り上げ、ポストコロニアル文学における自己表象と西洋の正典的自伝とのあいだの関係のアンビヴァレンスを分析した。だが、20 世紀後半の自伝をポストコロニアル批評やフェミニズムの観点から考察していくうちに、こうした自伝的テクストが実はモダニズム期における自己の概念化に多くを負っていることが明らかになった。英語圏の代表的な自伝研究者ポール・ジョン・イーキン（Paul John Eakin）は「身体」と「関係」を基とする自己モデルを提示しているが、そうしたモデルの起源はウィリアム・ジェイムズやフロイトであるとされている。それゆえ、20 世紀以降の英語文学における自伝、自己表象の問題を扱うとき、まず、モダニズム期においていか

に現代につながる自己モデルが構築されていったのか、その過程を詳しく検討する必要があると考えた。

アメリカのジェイムズ・オルニー（James Olney)、フランスのフィリップ・ルジュンヌ（Philippe Lejeune）らによって構築された1970 年代の自伝理論は、自伝を文学の一ジャンルと位置づけることによって、自伝をまっとうな文学研究の対象として確立しようとした。しかしその後、脱構築、フェミニズム、ポストコロニアリズムの影響の下に、自伝研究はそのジャンルの不決定性そのものに目を向け、ふたたび回想録、証言、手記といったさまざまな自伝的形式を取り扱うことになった。そして現在、自伝研究はライフライティング研究へと視野を広げ、英語圏ではとくに文化研究、歴史主義研究の分野から注目を集めつつある。

本研究の着想は、そうした近年の研究動向を踏まえたうえで、フェミニズムやポストコロニアル批評が提唱する「集団的自己」、「身体的自己」などの自己モデルの構築過程をモダニズム期に遡り、当時の社会的事象として分析することによって、現代批評において流通する「オルタナティヴな」自己モデルそれ自体を歴史的に検討し直すことであった。また、モダニズム研究の文脈において、トランスナショナル・モダニズム、ポピュラー・モダニズムの観点から、モダニズムの正典の読み直しを行うことも必要であると考えた。ウルフ、スタインの自伝については、フェミニズム、クイア理論の視点による研究が近年進んでいるが、それらの研究の大半は、従来的なヨーロッパのハイ・カルチュアとしてのモダニズム研究の枠内に留まっている。英国ハイ・モダニズムの作家をハーレム・ルネサンスの作家ら、あるいは同時代の英国の移民作家らと対置し、モダニズム期の「自己」モデルの形成にあたってセクシュアリティにまつわる言説がいかに人種言説とも交錯するか考察するという点、さらにはこうした「文学的」自伝を社会現象の枠内にふたたび位置づけてみてはどうかと考えるにいたった。

２．研究の目的

本研究の目的は、モダニズム期に行われた自己表象をめぐる理論構築の過程を、同時期の自伝的テクストの調査、収集、及び分析を通じて検証することであった。ヘンリー・ジェイムズ、ジョウゼフ・コンラッド、W. E. B. デュボイス、ガートルード・スタイン、ヴァージニア・ウルフといったモダニスト作家は、ウィリアム・ジェイムズによる新しい心理学やフロイト精神分析の影響の下、みずから自伝的テクストを執筆することによって、デカルト的コギトとは異なる新しい自己モデル――身体性、他者との関係性によって成立する自己――を構築しようとした。彼／女らはまた、「唯一無二の私」というロマン派的な自己像に懐疑的であり、人種やジェンダー、セクシュアリティといった社会的要因によって規定される自己の記述様式を模索したのである。

こうした状況を踏まえた上で、本研究では、代表的なモダニスト作家による実験的自伝を、執筆状況や草稿の調査も含めて緻密に分析することを目指した。それと並行して、20 世紀前半の英語圏で大量に生産されていた正典的ではない自伝テクスト、一般市民による回想録あるいは移民の手記といった類のテクストを調査しし、ハイ・モダニズムとの関係を考察しようとした。同時に、以前から行ってきたポストコロニアル文学の自伝性の問題も引き続き考察し、モダニズム／モダニティの時空間の再検討も合わせて行うこととした。

３．研究の方法

2008 年度から３ヵ年の研究期間においては、ヴァージニア・ウルフ（Virginia Woolf）の自伝的著作の執筆過程の調査及びテクスト分析を中心に研究を進め、ウィリアム・ジェイムズ、及びフロイト派精神分析のおける自己（自我）をめぐる議論を再検討し、モダニスト作家の自伝実践が同時代のどのような理論と呼応しているのか考察した。

具体的には、クエンティン・ベルらによって編集され死後出版された『存在の瞬間』（*Moments of Being*, 1976）収録のウルフの自伝的テクストの断片を、大英図書館、サセックス大学図書館所蔵の草稿から調査し、未完に終わったこれらの自伝プロジェクトによって、ウルフがどのような自己表象のあり方を模索していたのか探った。また、これらの自伝テクストと、「現代の小説」（“Modern Fiction,”1924)に見られるような創作論（この中でウルフは life-writing という語を使用している)、『オーランドー』（*Orlando*, 1928）や『ロジャー・フライ伝』（*Roger Fry: A Biography, 1940*)などの「伝記」テクストとつき合わせることによって、ウルフの自己理論の全体像を把握しようと努めた。

当初は W. E. B. デュボイス（W. E. B. Du Bois)の研究を並行して行う予定であったが、2007 年度内に初期から中期の作品に関しては一応の調査を終え、2008 年に論文を刊行したこと、ウルフ関係の資料が膨大であったため３ヵ年の調査を要したことにより、デュボイスについてのより綿密な資料調査は次期研究期間に回すこととした。

ウルフの自伝研究と並行して、ハイ・モダニスト作家、理論家による「メタ自伝」言説を歴史的文脈の下に相対化する目的のため、1890 年代から 1945 年までの時期の英米にお

ける自伝、回想録、手記の出版状況（どのようなテクストが、どのような階層の著者によって書かれているか）を、大英図書館、米国国会図書館のカタログ等を通じて調査した。その過程で、英国人女性の中東旅行記、あるいは中東からの移民女性の手記といった自伝的テクストを発見し、2009 年から 2010 年にかけては、英国人女性ジャーナリストでトルコを旅したグレース・エリソン(Grace Ellison)、エリソンの手助けと編集によって手記や小説を英語で出版したトルコ人姉妹ゼイネブ・ハヌーム(Zeyneb Hanoum)、メレク・ハヌーム(Melek Hanoum) のテクストに的を絞って綿密な調査をした。

さらに、本研究期間以前から引き続き、現代（ポストコロニアル）文学と自伝性の関係をモダニティという問題意識からの再検討を行ってきたが、本研究期間においてはとくに、カリブ出身の英国作家デヴィッド・ダビディーン（David Dabydeen）に焦点を当て、彼のテクストがスレイヴ・ナラティヴや近代絵画、モダニズム文学といった先行テクストの読み直しによって「自伝」の新たな可能性を模索する過程を検証した。並行して 18 世紀の自伝、スレイヴ・ナラティヴの基礎的な調査も行った。

４．研究成果

本研究の成果については、(1)ウルフ研究、(2)グレース・エリソン及びハヌーム姉妹の研究、(3)デヴィッド・ダビディーン研究の 3 つに分けて、概要を記述したい。

(1)ウルフ研究

ヴァージニア・ウルフは生涯にわたって幾度か「伝記」と銘打った作品を発表したが、そのかたわら自伝の執筆も試みていた。ウルフは文字通りの意味において、現在に繋がる自伝およびライフ・ライティング研究の先駆者でもある。ウルフ自身、ライフ・ライティングという語を実際に使い、狭義の「自己」の問題を超えて「生を書くこと」全般の問題を考察しようとした。彼女は実際に恋人ヴィタ・サクヴィル＝ウェストをモデルとした架空の伝記『オーランドー』（1928 年）や、19 世紀の詩人エリザベス・バレット・ブラウニングの飼い犬の伝記『フラッシュ』(1933 年）といった作品を書き、「新しい伝記」を自ら実践しようとしていた。

「過去の素描」は「首尾一貫した生」を自己物語において再演するべきものではなかった。自己はけして、自伝で語られる断片的な物語を統合する中心ではない。「回想録」すなわち記憶の集積としての自伝の多くは、自己の物語を語る以上に他者の物語を語っている。「過去の素描」もまた他者の物語を語り、他者の自伝を書くことを目指し、そうした言語矛盾的な試みの不可避の失敗を自ら刻印するテクストである。

ウルフの母は「過去の素描」前半部分で中心的役割を担う人物である。しかしウルフ自身もまた、こうした「目に見えない存在」、母その人を十分に書くことができない。ウルフが実際にこの自伝を書くことを困難に感じていたことは、改稿作業の様子からも伝わってくる。その意味においても、この自伝が一度、1939 年 7 月から 1940 年 6 月にかけて、一年近くものあいだ新たな執筆を中断されていること、しかも「1939 年 7 月 19 日」の初期草稿からは完全に削除されてしまった部分があることは非常に興味深い。結局書くことができなかったその部分とは、母の死後、二年間にわたってウルフが煩った病をめぐる記述である。病気の原因は、母の死がちょうどこの時期に重なったためだった。生涯にわたって幾度もこの「神経衰弱」の発作に悩まされたウルフにとって、病気とは文学者としての精神が身体の束縛を受けていることをもっとも明確に示す現象だった。

「過去の素描」の割愛された草稿では、ウルフは自分の病を書くことの不安を打ち明けている。この病の二年間は、ウルフにとっては唯一、物語もエッセイも書けなかった時期でもあり、その時期に立ち戻った「自己」の視点で書くことは「すべてを台無し（クイア）にする」危険を伴っていた。ここでの queer という語は無論、現代的な「クイア」という意味で使われているわけではないが、「病んだ自己」の物語が書かれるとすれば、それは通常の「自己」の物語を逸脱した奇妙な（クイアな）物語であるほかはなかっただろう。

日記によれば、1939 年 1 月にフロイトに対面した後、ウルフは初めてフロイトの著作を実際に読むことになる。しかし、ウルフのフロイト引用は、フロイト理論をたんに自分の物語に適用しているのではなく、むしろフロイトのパロディを演じ、男児をモデルにヘテロセクシュアルな価値観の上に構築されたエディプス物語への反論である。彼がエディプス物語に固執して女性の同性愛の物語に非常に複雑な筋書きを与えたのに対して、ウルフはより簡潔な物語を提示した。ウルフが書こうとしたクイアな自伝とは、愛の対象が母から父へと移行することのない自己の物語、母の死によって自己もまた死ぬしかない物語である。

ウルフによるフロイト思想への応答を緻密に読み直すならば、そこには両者の思想のあいだの、単純な影響関係や敵対関係では説明できない複雑な絡み合いが見えてくる。「過去の素描」前半部では、幼い頃、鏡に自分の姿を写すことを恥じたという経験が語られている。鏡を恐怖しつつも執着する「わ

たし」は、フロイトの言う初期ナルシシズムからの完全な脱却に失敗した「わたし」、自我理想を愛の対象に選択することに失敗した「わたし」である。同時に、個人的な記憶は女性の身体を媒介として、過去の無数の女性たちの記憶ともつながっている。さらにウルフは、鏡にまつわる夢の記憶を語るが、この夢の中では鏡に対する恐怖心は「動物の顔」として具現化する。自己愛の禁止を命ずる自我理想（超自我）のアタヴィストな特性を形象化したものだとも言えよう。『ナルシシズムについて』の最終段落でフロイトは、こうした自我理想が社会的なものであり、集団心理に結び付いていること、自我理想とは「家族、社会、国民の理想」でもあることを指摘している。鏡に映った「動物の顔」は、こうした集団心理による束縛の暴力的な側面を彷彿とさせるイメージでもある。フロイト的な思考の枠組を活用しつつ、フロイト自身が構築した自己物語からはあえて逸脱することによって、ウルフは、自己の記憶を（ヘテロ）セクシストな権威の下で女性が自己愛とともに同性愛をも禁止される過程として語り直そうとしたのだろう。

一年近くの中断の後、執筆が再開された自伝の冒頭には「1940 年 6 月 8 日」と日付がある。同年 7 月にはドイツとの全面戦争が始まった。自伝を再開するにあたってウルフは、作家の個人的な物語が、より大きな物語、ヨーロッパ文明そのものの死の物語へと連続していることを確かめようとしていた。1939 年から 40 年にかけてウルフが読んでいたとされるフロイトの著作は『幻想の未来』、『文明とその不満』、『集団心理と自我の分析』であり、精神分析を個人の心理の問題から集団心理、そして文明論へと拡張しようとした時期の著作である。「過去の素描」後半部では、母とステラの死後ウルフの生活に大きな割合を占めることになった父レズリーの肖像が、フロイト的な初期集団の指導者として、アンビヴァレントな愛憎の対象であると同時に、どこか原始的、動物的でもある存在として描かれている。レズリーはいわば、ヴィクトリア朝人という集団における自我理想の具現化であるとともに、そうした集団心理のアタヴィズムと暴力性の象徴である。

「過去の素描」は文字通りの意味で、明確な「終わり」を持たないテクストである。『存在の瞬間』改訂版（1985 年）に収録されたテクストは、モンクス・ハウス・ペーパーの手書き草稿の修正版である大英図書館所蔵のタイプ原稿に基づいているが、実際のタイプ原稿では手書き草稿にある最後の一段落がすべて割愛されている。1940 年のモダニスト作家の文法と語彙では、新しいライフ・ライティングは、いまだ書かれることのない不可能な物語、いまだ生まれぬ「シェイクスピアの妹」の手による「終わらない近代」の物語にとどまるほかなかった。

(2)エリソン及びハヌーム姉妹の研究

グレース・エリソンはウルフと同時代において、「シェイクスピアの姉妹」をトルコに見出そうとしたイギリス人女性である。『デイリー・テレグラフ』の通信員として 1913 年秋から 14 年初頭にかけてイスタンブルに滞在したが、その際彼女はトルコ女性と同じチャルシャフ（全身を包み込む黒衣、顔も厚いヴェールで覆う）を着用し、ハーレム（民家内に設けられた女性居住区）で生活をしていた。自著の出版以前にエリソンは、ゼイネブ・ハヌームの書簡集『あるトルコの女のヨーロッパの印象』(*A Turkish Woman's European Impressions*, 1913)と、ゼイネブの妹メレクの小説『アブデュルハミトの娘――オスマン帝国の王妃の悲劇』(*Abdul Hamid's Daughter*, 1913）の編集に携わり、姉妹が英語で、西洋に向かって直接語りかける手助けを与えている。

ゼイネブ・ハヌームとその妹メレクは、アブデュルハミト二世の外務大臣ヌーリ・ベイの娘であることがわかっている(Reina Lewis, *Rethinking Orientalism*, 2004）が、「ゼイネブ」、「メレク」は本名ではなく、彼女たちがモデルとなったピエール・ロティの小説『魔法を解かれた女たち』（1906 年）の登場人物の名前を筆名にしたものである（「ハヌーム」は本来は女性の称号)。姉妹は、ロティがイスタンブルに滞在した際に彼と実際に会い、アブデュルハミト 2 世の治世下でのトルコ女性の苦しみを小説に書くように依頼した。ロティは依頼どおり小説を執筆するが、その試みは結果的には中途半端なオリエンタリスト・ロマンスに終わっている。

『魔法を解かれた女たち』上梓の直前、ハヌーム姉妹はヨーロッパに亡命する。ヨーロッパに到着した姉妹はエリソンに出会い、彼女の助けを借りて、自分たちの声を英語で活字にすることに成功する。だが、姉妹のテクストが、編者エリソンのオリエンタリズムの眼差しから完全に自由であるとは言いがたい。『あるトルコの女のヨーロッパの印象』は、ゼイネブがエリソンに宛てた書簡をエリソンが編集し、序文をつけて出版したものである。文字テクストのあいだに挟み込まれている姉妹の写真の多くは、エリソンが撮影したものと推測され、彼女の説明文が添えられている。

しかし、エリソンの介入をたんなる「サバルタンの声の抑圧」とのみ捉えることはできない。また、ハヌーム姉妹の物語を、たんなる東洋と西洋の対立／交渉の過程とのみ解釈することもできない。二人の物語は、近代化、ナショナリズムといったオリエンタリズ

ム以外の「大きな物語」とも密接に関わっている。同時代のトルコにおいては、近代化とナショナリズムとはかならずしも対立概念ではなく、公的な言説においてはしばしば、二つは密接に結びついていた。1908 年の青年トルコ人革命以後のトルコでは、女性をハーレムとヴェールから解放することは近代的な国民国家建設に必要な労働力を確保するための重要なアジェンダだった。第一次世界大戦によってオスマン帝国が崩壊した後に誕生したトルコ共和国では、近代化政策の一環としてヴェールは事実上廃止されている。『トルコのハーレムのイギリス女』のなかでエリソンは、女性の解放を推し進めているのが男性だという事実に驚き、同時にヴェールからの解放がかならずしも女性たちにとって最優先事項ではなかったことを見逃さずに記述している。

ハヌーム姉妹の物語を再構築するうえでさらに重要なのは、階級の問題である。ゼイネブの西洋批判は、オスマン朝の上流階級出身である彼女自身の階級意識によるところもあった。妹メレクの小説『アブドュルハミトの娘』では、オスマン宮廷の王女と奴隷の友情が描かれている。1908 年まで存続していたオスマン帝国の奴隷制は、西洋人にとっては一夫多妻制とともに、トルコの後進性を表わすものであり、女性解放とともに、前資本主義的な奴隷制を廃止することは、「自由な労働者」を作り出すためのトルコの重要な近代化政策の一つだった。西洋人読者の偏見を和らげるために、エリソンは一九一五年の著書のなかで、オスマン帝国の奴隷制が欧米の近代的な奴隷制に比べて「人道的」であった点を強調している。

『トルコのハーレムのイギリス女』で、エリソンはしばしば、ハーレムのなかで「書くこと」がいかに困難であるかを訴える。その最大の理由は、（ウルフが『自分だけの部屋』で描いたような）「鍵をかけた、自分だけの部屋のなかにいる自己」を実現することが不可能なことである。だが、絶え間なく訪れる来客ばかりが問題なのではない。来客から逃れて自室に引き篭もっても、そこには、エリソンが「ミス・チョコレート」と呼ぶ黒人奴隷が控えており、彼女の世話を焼いてくれる。真の意味で「自分だけの部屋」が持てないのは、「ハーレムのイギリス女」ではなく、このミス・チョコレートのような女性である。エリソンの著書には、エリソンとミス・チョコレートがともにチャルシャフを身につけて、並んで坐っている写真がある。エリソンはミス・チョコレートに向かって微笑みを浮かべているが、ミス・チョコレートの視線は、エリソンにもカメラの方向にも向けられていない。この写真は、人種と階級を超えた女性の友情の可能性と不可能性を同時に示唆する、興味深い写真であると言える。

(3)デヴィッド・ダビディーンの研究

ダビディーンは 1955 年ガイアナ生まれの詩人、小説家である。10 代半ばでイギリスに移住し、文学および美術史の研究者として、現在はウォリック大学で教えている。エスニシティ的には南アジア系である（カリブ地域で奴隷制が廃止された後、プランテーションでの労働力不足を補うためにインド亜大陸から年季奉公労働者として移住させられた人々の子孫にあたる）。

ダビディーンの最初の著書は、1984 年に刊行された『奴隷の歌』(*Slave Song*) という詩集である。収録されている詩はすべてガイアナの農村で話されているクレオール英語で書かれているが、巻末には詩人自身による個々の詩についての解説および英語への「翻訳」が付いている。詩集のタイトルになっている詩「奴隷の歌」(“Slave Song”) は、身体的に痛めつけられ自由を奪われたプランテーション農場の男性奴隷が女主人を強姦するという妄想に耽ることによって過酷な奴隷制をかろうじて生き延びるという内容である。

『奴隷の歌』以後のダビディーンは純粋なクレオール語ではなく、クレオール的要素を交えつつより広範な読者を想定した英語で書くようになっている。そうした作品の一つ、物語詩「ターナー」(“Turner,” 1994) は、J・M・W・ターナーの絵画『死者と瀕死の者を船外に投げ棄てる奴隷商人たち』(*Throwing Overboard the Dead and the Dying*, 1840) を下敷きにしている。ターナーの絵は「ゾング号の虐殺」（保険金詐取の目的で病気の奴隷を奴隷を海に投げ棄てた 1781 年の事件）に題材を得たものである。「ターナー」は海に投げ棄てられた奴隷が自らの人生を語るという設定の詩であるが、詩の結末部で語り手は、海の底に沈み、そこから「民族最初の人間」である新しい自己像が、三人称で立ち現れる。この新しい自己には「星も土地も言葉もコミュニティも母もない」(XXV, 40) とされ、過去と現在からの完全な断絶としての「死と自由」を達成した状態にあることが示される。奴隷にとっての真の自由が存在するとすれば、それは海の底での死によってのみ達成されうるという結末において「ターナー」は、オラウダー・エクイアーノの自伝のような、資本主義の論理にのっとって勤勉に働き貯金をして自らの自由を買い取る「模範的」な奴隷の物語の背後に取り憑いている、別の物語の可能性を示している。また「ターナー」における自由は、「奴隷の歌」で主人の座を奪いたいと願う奴隷の夢想する自由に比べても、弁証法的な闘争そのものを放棄しているという点で、いっそうラディカルな

モダニティ批判となりうる。

「ターナー」で描かれる自由は「コミュニティのしがらみから完全に解放された状態」であるが、ダビディーンは他方、歴史の内側で生き延びるための新しい共同性と連帯のあり方を模索してきた。美術史研究者としてのダビディーンのダウ意表的な著作『ホガースの黒人』(*Hogarth's Blacks*, 1985)における議論によれば、ウィリアム・ホガースの描く黒人はそうした同時代の黒人に対するステレオタイプの影響をある程度受けているが、その一方で、イーストエンドの生まれであるホガースは、黒人を「白人下層階級と同じカテゴリーに属する者」とみなして共感を示している。また、『娼婦一代記』によってホガースは、黒人、下層階級、女性がともに搾取される者たちとして連帯する可能性を示したとされる。

抑圧された者の連帯可能性は、インド系ディアスポラ作家として現代のブラック・ポリティクスに関わっているダビディーン自身にとって重要なテーマである。しかし、90年代以降のダビディーンは、被抑圧者の同質性を強調するよりはむしろ異質性に注目し、「他者との連帯はいかにして可能か」といった倫理的な問いが、著作の中心的テーマとなる。こうした「倫理的転回」は、多文化主義が破綻した後のイギリス社会の現状、「ブラック」という公共圏の消失といった社会現象に対する、きわめて「文学的」とも言えるダビディーンの応答である。

『ホガースの黒人』から 14 年後に出版されたダビディーンの長編小説『娼婦一代記』(*A Harlot's Progress*, 1999) はもちろん、ホガースの版画を題材にした小説である。小説は奴隷解放運動家プリングル氏がムンゴの自伝を代筆しようとする場面で始まり、画家ホガースがムンゴをモデルとして描いた絵が有名になるという逸話で終わる。いずれの白人も「善意の人」ではあるが、ムンゴの真の姿を表象することには失敗している。しかし重要なのは、ムンゴ自身もまた、他者を表象することには失敗しているという点である。小説の末尾でムンゴは、小説中で死んだ女性たちへの喪に服しつつ、自ら死の床にある。ムンゴの状態はデリダの定義する「成功しない喪の作業」として説明できる。ダビディーンの他者表象は、共同性の不可能という現代政治の現実を記述するにとどまるものではなく、自伝という形式の中に他者の他性を許容する新しい共同性のあり方を模索している。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）

① 中井亜佐子、「新しさはいかにして世界に登場するか――現代英語詩の想像力と近代性」、『言語社会』第 5 号、査読無、2011 年 79-95 頁

② 中井亜佐子、「モダニズム／モダニティの時空間――トランスアトランティック・モダニズムの展望」、『言語社会』第 4 号、査読無、2010 年、124－130 頁

③ 中井亜佐子、「モダニズムと（反）自伝――ヴァージニア・ウルフ『過去の素描』を読む」、『言語社会』第 3 号、査読無、2009 年、110－127 頁

④ 中井亜佐子、「女であること、アジア人であること――現代英国の文化闘争」、中野知律・越智博美編、『ジェンダーから世界を読む II――表象されるアイデンティティ』、明石書店、査読無、2008 年、93 – 112 頁

⑤ 中井亜佐子、「W．E．B．デュボイスの『黒い王女』、あるいは「人種」というロマンス」、遠藤不比人他編、『転回するモダン――イギリス戦間期の文化と文学』、研究社、査読無(依頼論文)、2008 年、286－309 頁.

上記論文は一橋大学機関リポジトリで公開しています。
http://hermes-ir.lib.hit-u.jp/ir/index.html

〔学会発表〕（計 3 件）

① Asako Nakai, “An Veiled Autobiography,” “Minorities and Globalism” Symposium, 2011 年 3 月 11 日, 一橋大学

② 中井亜佐子、「奴隷制とモダニティ――David Dabydeen の批評的想像力」第 82 回日本英文学会全国大会、2010 年 5 月 30 日、神戸大学

③ Asako Nakai, “Autobiography of the Other: From Slave Narrative to *A Harlot's Progress*.” Glocal Imaginaries: Writing/ Migration/Place. Lancaster University, UK, 12 September 2009.

〔図書〕（計 1 件）

① 中井亜佐子・吉野由利（編書）、『ジェンダー表象の政治学――ネーション、階級、植民地』、彩流社、2011 年、296 頁

６．研究組織

(1)研究代表者

中井　亜佐子（NAKAI ASAKO）

一橋大学・大学院言語社会研究科・教授：

研究者番号：10246001